

立原正秋全集

第三十一卷

角川書店

立原正秋全集 第二十一卷

昭和五十九年四月十二日初版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三一三

電話

〇三一二三八一八五二一 営業部
〇三一二三八一八四五一 編集部

振替東京三一 九五二〇八 二一〇二

Printed in Japan 0393-573421-0946(0)



落丁・乱丁本はお取替をいたします

立原正秋全集 第二十一卷 目次

その年の冬……………五

水仙……………二八三

空蟬……………三〇五

詩歌集 光と風……………三五

解題……………武田勝彦 三九七

その年の冬

疎水

亀岡に上手な面打がいる、と伝えきいたのは久しい前であった。直子は石垣と生垣に沿った小さな流れのそばを家に向って歩きながら、そのことを思いだした。以前から小面^{こおもて}を一面ほしいと考えながら、なんとなく日が過ぎて行っていた。

ここ南禅寺界限は、疎水から水を引いた小さな流れがいたるところにあり、流れに沿った道を歩いていると、せせらぎが胸にひびいてきた。

二十三歳の秋、東京から京都にきたときには、この小さな流れの音をききわけられなかった。流れの幅は一メートルたらずで勾配もゆるやかだった。あの頃は、わけがわからないままに歩いていた、と思う。

十年をふりかえってみると、とりとめがなかった。どこにも点を打たずに生きてきたような気がした。こちらの心に点を打ってくれる対象もいなかった歲月であった。

二十二歳の春、ある男と結婚したが、男は新婚旅行先の宮崎県の都井岬で、野生の裸馬を乗りまわしているうちに振りおとされ、大きな岩に頭を打ちつけ、ほぼ即死にちかい状態で二十七年の生涯を閉じた。男は学生時代に乗馬の選手で、野生馬に乗るのがかねてからの念願であった。直子はいまだに男の顔かたちも憶えていなかったが、都井岬

の風景だけは残っていた。白昼夢をみたような一日であった。

あくる年の夏のはじめ、宇治の母方の祖母から再婚話が持ちこまれた。相手は南禅寺のちかくで七代続いている大槻流の茶の宗家の当主だった。当年三十六歳になり、数年前に妻を病で失い、二人の子がいるが、直子も染みがついた身であるから、このさい後妻でも行くべきではないか、というのが祖母の考えであった。茶の宗家といっても、当世に喧伝されているような盛んな家元ではないから、気苦労はないだろう、と祖母は言っていた。直子の母の生家は宇治でだいたい茶を商っていた。そんなことから大槻流とはたがい数代も前からつきあいがあり、直子の母も茶は大槻流を習ってきていた。

「いい話だと思うわ」

とそのとき母の文枝は賛成した。

父の敬三からは、もう子供ではないのだから自分できめなさい、と言われた。

この期をのがしたら、との祖母の言葉にのせられたような再婚だった。話がまとまってそのとしの秋に大槻家にはいったが、直子に投げやりな気持があったわけではない。都井岬で死にわかれた男とは見合結婚だった。たがいをたしかめる間もなかった。白昼夢から逃れるように大槻家にきたのであった。

疎水からの引き水が十月のおそい午後、陽に光って砕け散りながら流れていた。ここに來てからの十年はわたしにとってなんだったのだろう……。

大槻家にはいったときの家族構成は、五十七歳になる姑の常世、先妻の二人の子の信貞、信次で、上が八歳、次男が六歳だった。ほかに住みこみの十七歳前後の女の内弟子が三人おり、彼女達は昼間は学校に通っていた。

「あなたは宗家の嫁ですから、大事などころにだけ顔をだせばよいのです。内弟子はまいねん補充されますから、こまかい家事は内弟子に命じて適当に使えばよいのです」

と常世は言った。内弟子といっても、ていのいい手伝女であることは数日してわかった。

ほかに五十年輩の執事がいた。仙波宗海といい、大槻流をすべてとりしきっていた。彼より五歳ほど若い友竹玄亭

が副執事で、大槻流はこの二人によって運営されていた。二人は朝九時になると出勤してきた。

さまざまな人の出はいろいろあった。ひとつきほど過ぎた頃、当世風の盛んな家元ではないにしろ、組織化されたかたちであることが見えてきた。それはまことに秩序のある全体であった。

夫の信宗から、すでに二人の男の子がいるので、直子とのあいだでは子はつくらないつもりで断種手術をした、と言われたのはその頃だった。直子はこれを他人事のようにきいたのを憶えている。大槻家にはいった当時の直子は、人形とまではいかずともそれにちかい存在だった。都井岬での白昼夢が現世を視る目を妨げていたのである。

このいやな臭はなんだろう……二か月ほど過ぎた頃、直子は、宗家全体に漂っている臭に気がついた。それは目に見えずどこからともなく臭ってきた。ほぼ同時に夫との間にも慣れ、都井岬での白昼夢が薄らいでいった。

そのいやな臭は家元の臭だった。世襲の家を七代も保ちこたえてきたのは代々の当主の才能からではなかった。それは組織であった。疎水から引き入れた流れが庭をめぐり、池には鯉が泳いでいた。そして如水庵という三疊台目の茶室にはみごとに露地がついていた。これらの庭は日本の伝統であった。しかし家全体に漂っている臭は伝統とは別のものだという感じがした。

これが男か、という感じのほかにはなじめなかった。常に家元としてつくろっている男がそこにいた。

一年が過ぎた。夫に女がいるのを知ったのは偶然だった。その秋の日の午後、直子は祇園のちかくの佃煮屋に行き、東京の生家に送る佃煮をたのんだ帰りに喫茶店によった。御用ききの商人が出はいりしていたが、姑の手前、生家への送りものをその人達にたのむわけにいかず、祇園にでかけたのであった。女としてどうやら夫の軀になじんできた頃だった。

その喫茶店でコーヒーをもらい、となりの席で、茶屋の女らしい二人がしゃべっているのを、きくともなしにきいているうちに、つぎの話が耳にとまった。二人は、如水庵さん、とさっきからくちに使っていたのである。

「そやけど、如水庵さん、いい男やわ」

「好かんわ、いやらしゅうて」

「そやけど」

「つた子姐さん、なんであんないやらしい男についていなはるのやろ」

「藝食う虫もすぎすぎ、稚児やうこもうまれたことどすえ」

いまから思いかえしてみても不思議だが、直子は、茶屋の女の話、他人事のようにきいていたのである。なじみはじめてきた夫の軀が遠くなっていった。そして都井岬での白昼夢が、霧のなかの出来事のようにぼんやり浮かんできた。この日らしい、都井岬での白昼夢は、消えもせず、はつきりかたちを見せもせず、直子のなかで一枚の絵になつてとどまつていた。

疎水からの引き水が十月の午後の陽に光って砕け散りながら流れていた。いちど亀岡の面打の家を訪ねてみようかしら……。大槻家に再婚してきて、子もうまず、人形にちかい女の生活をしてきて、軀にも精神にも滓かみのようなものが溜たまっていた。京都国立博物館で能衣装と能面の展覧会を観たのは数年前であった。そのとき小面に目をとめ、こんなはなやかな女がいたのか、と現在の自分を振りかえり、せめてあの小面を自分の部屋に掛けてみたら、と思った。門をはいり、裏玄関から家にあがった。

亀岡の面打を訪ねてみよう……。彩りのないこの生活に、せめてあの小面がそばにあつたら……。わずかな慰めでもよかった。

着かえていたとき、ごめんなさい、と声がして姑の常世がはいってきた。

「ごころうさんでした。如何でした」

直子は、次男の信次の大学進学の話で高校の教師に呼びだされたのだった。

「大阪の私立大学ならなんとか入れるだろう、とのことでした」

「それならよいんですが。この子は二人とも頭がわるく、あれは先妻が頭がわるかったからですよ」

常世も東京出身だった。その点では直子と気があったが、宗家を守る常世の執念には直子もついて行けなかった。頭がわるくとも二人の男の子は気性がさっぱりしていた。十年間、二人の子とのあいだで確執はなかった。むしろ夫

より二人の子に親愛の情を抱いてきた面があった。長男は大阪の私立大学に通っていた。

「あなたにも子をうませればよかったのに」

常世は独りごとのように言つて直子の部屋から出て行つた。

しかしあの姑も解らないひとだ……。姑を視ていると、彼女のなかで東京と京都が闘せめぎあっている感じがした。直子と同じくいまも京ことばが使えなかった。ながいこと京都で暮らしてきて話せるはずだったが抵抗があるらしかった。それは直子も同じだった。男が京ことばで話しているのをきいていて虫酸が走る思いをしたことがなんどかあった。

あなたにも子をうませればよかったのに……。もし子がうまれていたら、この心の情態は変つていただろうか……。すでに二人の子がいるから断種した、と言つた十年前の夫を考えてみたが、輪郭がさだかでなかった。先妻の子と後妻の子とのあいだの確執を恐れてのことだったのか。藝子を請けだして茶屋を持たせ、女の子をうませた身であつてみれば、もう子供は欲しくなかったのかもしれない。

祇園の売れっ子だった、という噂をつてに、花見小路のその茶屋の前まで行つたことがあった。喫茶店で二人の女の子の話をきいてから半月ほどすぎた頃だった。女の嫉妬はなかった。自分が置物であることに気づいたのであった。

せまい道の両側に茶屋がならんでいるところで、田村つた子、と標札がかかつていた。茶屋の登録番号を書いた札もかかつていた。あとで登録番号から身元を調べてみたら、女は直子より四つ年上だった。

他人事のように茶屋の前から離れて花見小路から出てきた。そして、ひとつの意志が死に絶えて行くのを視た。都井岬で死んだ男とのあいだではどんな将来があつたのだろう、と考えてみたが、すでに測りようがなかった。再婚の膳だてをした母方の祖母をうらむ筋合もなかった。すべては自分のことであつた。

着かえをすませて障子をあげたら、露地の方に庭師がはいっていた。右京区の太秦にいる七十年輩の大島佐二という職人で、庭をつくらせたら日本一といわれている男だった。若い職人を三人つれてきているらしかった。

そうだ、大島さんは亀岡に山を持っており、そこから木や石を運んできて庭をつくる、と言っていたが、と直子は老職人の言葉を思いだした。もしかしたら面打の人を知っているだろうか……。

庭下駄をつっかけて露地に行った。

老職人は外露地に立って若い職人の仕事をみていた。

「ごろうさんです」

「やあ、若奥さん。またお邪魔しております」

この老職人は入歯をきらい、上下の前歯が数本残っているだけだったが、正確な発音だった。

「大島さん、亀岡に面打がいるのをご存じかしら」

直子はきいた。

「亀岡の面打というと、一人しかおりませんな。了覚というおかたです。もとはその南禅寺の雲水でしたが、女に好かれましてな、寺を出て行かれました。もう十二年になりますかな」

「大島さん、その了覚さんを御存じなの」

「よく存じあげております」

「面を一面もとめたいと思ひまして。紹介してくださいるかしら」

「おやすい御用です。ちかいうちにいらっしゃいますか」

「そうしたいと思ひます」

「明日、亀岡に行きますので了覚さんに伝えておきましょう」

「女に好かれてお寺をでて行かれたとは面白い話ですわね」

「四条河原町の菓子のお舗の若奥さんでしたが、了覚さん、女を惹きつけて離さないとところがあつたんでしょうな。沼津に御自分の寺があるおかたですが、その老舗の若奥さんと亀岡に駆けおちしてしまつたんですわ」

「亀岡になにかよりどころでもあつたのでしょうか」

「それはわかりませんが。亀岡駅からタクシーで月夜見橋とおっしゃればおわかりになります。橋の手前の道を右にはいりますとすぐです。保津川の上流ですが、あの辺では大堰川おおいとよんでいます」

女を惹きつけて離さない雲水とはどんな男だったのだろう……。直子は、僧堂から出て女といっしょになり面打になった男を想像してみたが、見当がつかなかった。

直子が亀岡を訪ねたのは、それから数日後だった。京都駅から山陰本線の急行列車にのったら、三十分たらずで亀岡についた。

了覚坊、と標札がかかっている平屋だった。玄関にでてきたのは、自分と同年ほどの渋皮のむけた女だった。木綿の袴に半幅帯をきりつと締めており、着物の着こなしからして京女には見えなかった。京都にきて十年になるのに、東京のように袖をきりつと着た女を見かけたことがなかった。やわらかい着物をでれつと着た女が多かった。

「大島さんから紹介にあずかりました大槻でございますが……」

「存じております。おありがとうございます」

六畳の部屋に通され、すぐ了覚が現れた。四十年輩の色の浅黒い男だった。

「小面を一面欲しいと思ひまして」

「大島さんから話は伺っております。一か月お待ち戴けますか」

了覚はあっさり承知してくれた。気むずかしい職人を想像してきただけに、なにかあつてなかった。

それから了覚は打った面を数面みせてくれた。二面ははなやかな小面で一面は瘦女だった。面の裏には了覚坊と焼印が押してあった。

「仕舞をおやりですか」

女房が茶を運んできたとき了覚がきいた。

「いいえ。茶の家元ですから、花と香のほかはなにも存じません。はなやかな女面おんなおもてがそばにあつたら、と考えて、おねがいがありました」

寂寞とした自分の内面を他人に話すわけにはいかなかった。

「さようですか。……はなやかなさを内に秘めた小面を打ってみましょう。十一月末までお待ちください」

なにかきっぱりした言いかただった。

ああ、ここでは夫と妻のあいだで呼吸が合っている……。直子は、渋皮のむけた女房を視ているうちにそう感じた。車をよんでもらい面打の家からでてきたとき、不思議な夫婦を視たと思った。京都からそう遠くない小さなまちに、静かに自分達の情念を燃やしている夫婦がいたのである。面を打つのは手仕事だった。もちろん量産はできないだろう。生活の基盤はその手仕事にあった。手仕事であるからには、生活の規模はそれ以上広がりもせず狭まりもしないだろう。駆けおちしてきた男と女が、十二年そうやって暮している。直子は、隙間のない男と女のあいだを視た気がした。

亀岡駅前のレストランでおそい昼食をかんたんにとり、帰りは普通列車しかなかったのもそれで京都にもどった。

帰宅したら、夫はまでもどってきていなかった。朝九時前にでて行ったが、花見小路の女の家にかがいがなかった。

夫は家にいるときは、宗家としての手前、着物に袴をつけていたが、外出のときは派手な洋服を着た。ふとい縞の水色のズボンに臙脂色の上衣、それにネクタイは緑色だった。紫色の上衣もあった。どこからそんな感覚がうまれたのか直子には解らなかった。ちんどん屋か藝人か成金趣味の感覚だった。もともと茶の家元も藝人にはかがいなかったが、しかし根本に風狂があった。風雅に徹することで茶もまたひとつの道になりえたのであった。

夫には花見小路の女のほかにもうひとり女がいた。奈良市内で大槻流の茶を教えている宮村幸江で、ことし四十歳になるだろうか。この女とは自由なつきあいらしかった。月にいちどは南禅寺の家元に來たが、如才のない女だった。逢うのはホテルらしかった。

花見小路で田村つた子の標札を眺めた日に、ひとつの意志が死に絶えて行ったが、しかし十年間をどうやって堪えてきたのだろう。家元を守るためだったのか、とも考えてみたが、そんな気持ははじめからなかった。直子は十年を振りかえってみて自分でも不思議だった。しかし、もう、これ以上はやって行けないだろう……。心の片隅にそんな感情が芽ばえていた。

組織化された家元制度のなかで直子は浮いていた。仙波宗海と友竹玄亭を動かしているのは姑の常世だった。直子